



塩屋祭り(現在は10月第3日曜日) 昭和3年祭礼

塩屋王子神社の謂われ

塩屋王子神社は熊野九十九王子のなかで特に古く格式の高いものとてております。

御祭神は現在、大日靈貴神(天照大神)・天津児屋根神(春日神社祭神)等で共に天岩戸伝説の神すが、これは後世祀られたものと思われます。

塩屋王子神社の歴史は六世紀まで遡ります。昔から塩屋では製塩を生業としていました。当時、朝廷で塩屋の塩を使っていたようです。又、古文書によりますと、日高より時の朝廷に白銀を調査するあります。当時、我が國で銀の採掘できる所は対馬以外に無く、航海技術等相当進んだ、諸々の技術者が日高に住んでいたと思われます。

又伝説では、權現磯に熊野権現が上陸、切目・神倉・飛鳥・速玉の各神社を経て熊野大社に還座なされたとの伝えもあり、当時有力な豪族が住み、その氏神が塩屋王子神社でなかったかと推察します。

十世紀になると熊野信仰の興隆にもない、既存の神社を王子神社に仕立ててきました。塩屋王子神社は最初に出来た七王子(藤代、塩屋、切目、磐代、瀧尻、近露、発心門の七社)の中の一社であります。

熊野御幸路において藤白坂より海を眺めたものの山また塩屋に入り、田辺に至るまで海岸に沿える道は、甚だ楽しい眺めであったことは中右記に「塩屋王子に至り奉幣す、上野坂上に於いて祓し、次に星養、次に伊南の里を過ぎ次に斑鳩王子…切部王子に参る、日入の間切部庄下人小屋に宿る、今日或は海浜或は野徑を歷、眺望極りなし、遊興多端也」とあり、御幸記には「この宿にて塩ゴリをかく、海を眺望するに甚雨に非ずんば興あるべきなり」とあります。正治二年十二月三日後鳥羽上皇三度目の熊野御幸の時、切目宿にて「海辺眺望」の題下に読める「漁火の光にかかる煙かな難の塩屋の夕暮れの空」と家隆卿が詠んでいます。

明治六年まで、塩屋浦山田莊九か村(名屋、北塩屋、天田、猪野々、森岡、南谷、立石、南塩屋)は塩屋王子神社と武塔天神社(現須佐神社)の二重氏子でしたが(名屋は元和以降に分離)北塩屋、天田、猪野々が塩屋王子神社の氏子となり、昭和四十年代に湊がわり現在にいたっております。

塩屋王子神社の大きな特徴は次のとおりです。

- ・祭神は天照大神でその神像が祀られています。
- ・社紋が二つ巴である。
- ・祭礼の御神儀に四神が描かれている鉢や毛槍(雉の羽根)星座がある。
- ・天皇家と同じ日の重陽の節句に祭礼がおこなわれてきた。
- ・古来より美人王子と謂われている。
- ・社域が現在の約十倍と広かった。
- ・境内になぎの木、イスの木、ヤマモモの木など樹齢七百年以上の老樹がある。



塩屋王子祠前碑 仁井田好古 (訳文 広野雅昭氏)

塩屋村は日高川の流れが海に入るあたりにある。昔は製塩を仕事にしていた。塩屋という地名の起りである。現在、村は南北に分けられている。そのうち北塩屋は、東は小高い山々に続き西は日高川に臨んでいる。その山に向かって数十段の石段を登ると上は平らになっていて樹木が薄暗く茂っている。そこに神社がある。塩屋王子と称している。また美人王子ともいわれている。美人という呼び名は昔の記録には見えない。その起源は分からぬ。

山の上に社がある。そこからは周りの風景を遠望することができる。それで昔(平安時代)帝が熊野に行幸する時には必ず休憩所になっていた。

白河法皇の行幸の時、お供の公卿(くわげ)たちに命じて神前に歌会を開かせている。また建仁元年(1201年)後鳥羽帝行幸時の記録「御幸記」(藤原定家筆)に「ここもまた景色の優れた所だ」と書かれているのはここを指しているのである。それ以後弘安4年(1281年)に至るまで数人の帝が行幸している。

元弘の乱(1335年)のおり大塔宮(護良親王・もりよしんのう)が難を避けて熊野に落ち延びた時もここに宿泊している。そうすると、昔帝たちが熊野に行幸したときに宿泊した建物がまだ残っていたのである。現在、それらの建物はすべて無くなり草木がびっしりと茂った中にその遺跡だけが残っている。

土地の人はそこを「御所の芝」と呼んでいる。「芝」とは、しめ縄を張った所という意味である。

塩屋王子の地形は東はうねねと継ぐ山々に連なり、西は海岸に臨んでいて、淡路、阿波の山々が広々とした碧海の彼方にかすんで見える。その北は幾つの山々が重なり合って半円を描くように空にそびえ、くねりながら西に走っている。それに囲まれるように一大海灣が鏡を開いたように輝いている。

以上が昔の地形である。その後数百年の長い間に海は土砂に埋まり、日高川の流れも移り広い入り江は数里にわたる肥大な平野となり、そこには村落が密集し、区分された田地が遠くまで広々とかすんでいる。海岸には翠の松林が墨眉を掃いたように数里も続く姿は四季を通じて、えもいえぬ眺めである。

花の朝、月の夕の美景は千年前と同じである。これこそ群中の別世界と言えよう。

この世に生きる人を見てみると老人と若者では考え方も違うし身分の上下によって趣味も別々である。ものの見方もみな同じであるはずがない。この岡に登ってかつてここを訪れた敷数が楽しみ遊び一王(大塔宮・護良親王)が恐れ隠れた後が今なお残っているのを見ていると心の底から深い感動が湧き上がってくるのを抑えることができない。ある人は帝たちが風光を賞(め)で楽しんだ様子を追想し、自分もわれを忘れて心ゆくまで楽しみ、詩を朗読したり口ずさんだりして帰るのを忘れてしまうだろうか。ある人は不運だった親王の遺跡を弔い、その威厳のある姿と激しい気迫に打たれて涙を流しむせび泣いてもなお収まらないほどに感動するだろうか。またある人は過ぎ去った長い歴史を見通しさまざまの出来事を見渡してどんな大異変に対しても心を奪われることなく、また様々の悲喜劇にも動搖せず悠々として世俗を超えた境地に心を遊ばせようとするだろうか。ここに私は碑を建て文を掘ったが後世この文を丁寧に読んだ人はこの三つのどれかに納得してくれるだろう。

塩屋王子神社案内図

六豆山へ0.3km



歌碑



ヤマモモ 樹齢1000年(推定)

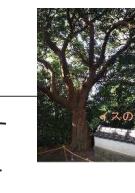
塩屋王子神社のヤマモモの木は大正10年和歌山県史跡の指定を受け、戦後も昭和33年和歌山県文化財(史跡)に指定されている。

「本國熊野九十九王子中の古社にして、由緒ある神社なれば別項大松とともにこれら老樹大木を保護すべきものとす。」



ナギノ木 樹齢700年(推定)

塩屋王子神社の御神木。大正10年和歌山県史跡の指定を受け、戦後も昭和33年和歌山県文化財(史跡)に指定されている。ナギは熊野権現の神木として古來から靈力ある樹木として考えられており、紀氏の関係のある神社や寺院に植えられている。当神社のご神木であり、2本神殿に並んでいる。向かって左は雄株、右は雌株であり実をつける。種子油は昔神社の灯用とされ、煤(すす)は墨の材料として珍重されたらしい。また、ナギの葉を守り袋に入れておけば災難よけになると信じられ、海の嵐にかけて漁師が大切にしたものと言われている。塩屋王子神社のご神木。紀氏のシンボルの木でもある。



イスノ木 樹齢900年(推定)

風に強く神社の防風に利用したと思われる。大正10年、和歌山県史跡の指定を受け、昭和33年和歌山県文化財(史跡)に指定されている。このような大木は県下でも非常に珍しいとされている。和歌山県文化財調査報告書の中で塩屋王子神社のイス木は「重要資料なれば保護する要切なり」としている。



後鳥羽上皇行在所の跡と称する御所の芝と謂われている。「芝」とはしめ縄を張ったところという意味である。江戸中期頃の熊野道中記に御所の跡王子の境内にあり、王子の跡続きて御幸の時の順宮(とんぐう)の跡なるべしとある。昔(平安時代)帝が熊野に行幸する時には必ず休憩所になっていた、白河法皇の行幸の時には、お供の公卿(くわげ)たちに命じて神前に歌会を開かせている。位置は今日のどちがっているようと思われる。先人に聞いた話では、最初社壇の西南雑木林の中にあったのが社壇の前に遷したのである。それから社壇の上に変更したが、数年後又社壇の前面旧位置に復して今日に至っている。

第三のみ:

夫木抄より
沖つ風 塩屋の浦に 吹くからに のぼりもやらぬ 夕煙かな

歌枕名より
こじとはじ 塩屋の里に 住じあまも 我がごとからき 物や思ふと 中務御親玉宗尊

としなみ草より
うしや今 塩屋ときくも 所からき 旅立ちに行き やむ身は 似雲

千載集又曾詞花集 より
白河法皇熊野へまいらせ給ひける御供にて、塩屋の王子の御前にて人々歌よみ侍けるに
思うふ事 波みてかなふる 神なれば 塩屋に跡を 足る、なりけり 後二條内大臣

新古今集より
白河院野に詣で給えけるに御供して、塩屋の王子に丁歌よみ侍けるに
立ち聴る 塩屋の煙 浦かざに なびくと神の 心ともがな 德大寺左大臣

塩屋王子神社 塩屋文化協会